

令和4年度 結果の分析及び今後の改善策(案)

(中間・**最終**)

天応中学校区 校番 22 学校名 呉市立天応小学校

重点	d 中期(3年間) 経営目標	e 短期(1年間) 経営目標	l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます)	m 今後の改善策(案) (こう改善します(案))
***	資質・能力を育て、確かな学力の向上を図る(探究の過程を通して)	○基礎・基本の徹底と豊かな対話の場の構築(学力向上) ○主体的に学ぶ土台の定着	<p>・2学期の単元末テストにおける正答率85%以上の児童の割合は、国語科 平均72%,算数科 平均70%と、中間結果を上回った。しかし、目標の80%には達しなかった。全体的に算数科に課題がある学年が多い。</p> <p>・「振り返りを次の学びにつなげている」と肯定的な回答をした児童は、95%で、中間結果を上回った。振り返りにより、学びが深まっていることを実感できている児童が多いと考える。</p>	<p>・2学期から実施してきたパワーアップタイムの取組により、成果が見られてきた。今後も継続していくことで、個のつまずきを把握し、基礎・基本の定着を図る。算数科の授業においては、適用題まで確実に取り組ませることで、自力解決の力を付ける。また、学年末に向けて、各学年の学習内容を確実に定着させるよう、計画的に取り組む。</p> <p>・資質・能力の育成に向け、引き続き授業改善に取り組むとともに、授業や行事等での振り返りの場を充実させていく。</p>
**	自立し、自律につながる生活基盤の確立	○状況に応じたセルフコントロール能力の発揮	<p>・1~4年生は、事前に「自分の目標設定」が不十分だったため、10月から目標設定を取り入れたことで目標時間を意識することが前回よりできたと考える。</p> <p>・取組週間については、土日を含む1週間のため、家庭の予定等にも左右されている。</p> <p>・メディアコントロールの達成値は48%と低いが、前回の結果と比べると、児童のセルフコントロール能力は向上している。</p> <p>・家庭の協力が必要不可欠である。</p>	<p>・来年度は、全学年、自分で目標を設定し、目標達成の意識を高めるようにする。</p> <p>・児童の実態に応じ、養護教諭と連携してメディアが体に及ぼす影響について具体的に指導する場を設定する。</p> <p>・学年通信等で、繰り返し家庭への呼びかけをする。</p> <p>・メディア週間には、児童が目標を達成できるように必要に応じて個別に声かけをするとともに、評価する。</p>
*	誰もが安全で安心して学べる教育環境の確保	○心豊かで、社会性を身に付けた児童生徒の育成 ○教育の質の向上と生活のバランスがとれた働き方の確立	<p>・各学級において、互いのよさを認め合う活動を行ったり、教員が児童一人一人のよさを認める声かけを行ったりしたことで、自己肯定感の向上につながったと考える。</p> <p>・「自分にはよいところがある」という問いに対して、否定的に回答した児童の中には、自分のよさに気付くことができず、気付いても受け入れることができなかつたりする実態があると考えられる。</p> <p>・時間外在校等時間が月45時間を超えた人数は、9・10・11月は9名、12月は7名、1月は5名である。昨年度は、延べ30名、今年度は延べ73名である。</p> <p>今年度は、天応学園開校準備を本格的に進めていることから業務が過多となっている。また、今年度新たに赴任した教職員が11名という多さで、昨年度までコロナ禍の影響で2年間実施していなかった行事等を実施したことで、一から計画や準備を行ったことなどの影響があると考えられる。しかし、「日々の業務の中で、充実感を得られている。」に肯定的回答が86.7%、「教職員間で業務の手助けなど、互いに頼みやすい雰囲気があると感じている。」100%、「新たな取組を行う場合、既存の取組の縮小や廃止など、スクラップアンドビルドを行っている。」80%と、いずれも昨年度より高い数値である。このことから、来年度に向けて、よりよい教育環境を共に築くことができる教職員集団とし高まりつつある。</p>	<p>・引き続き、学級において「いいところ見つけ」等のお互いのよさに気付く取組を行っていく。</p> <p>・教員間で自己肯定感の低い児童の実態を共有(月1回)し、児童自身が自分のよさに気付くよう、意図的に声をかける。</p> <p>・行事を通して、異学年交流の機会を設け、互いに認め合う場を仕掛ける。</p> <p>・各主任を中心とした分掌部会、隣接ブロック学年等、互いに協力し合える体制を継続する。</p> <p>・今年度実施した行事等の計画案や実施後の反省等の記録を確実に引き継ぐことができるように整理し、次年度はそれらを活用して計画を立案できるようにする。</p> <p>・ワーク・ライフバランスを大切にするとこの観点から一人一人の教職員の生活も互いに思いやることのできる雰囲気をつくり出す必要がある。</p>

